

卷 頭 言

生産研究の新発足にあたって

兼 重 寛 九 郎

生産研究が発刊されたのは、昭和24年10月であつたから、今年で第5年目を迎えたことになる。この3年余りの間、編集委員の非常な努力と、誠文堂新光社始め関係者の協力で、かなり成果を挙げて来たことは、多くの人の認めるところであるが、本誌のねらいが非常に実現の困難なところにあつたため、それが完全に実現されたと認める人はほとんどないこともまた事実である。

深遠な学術も極力平易な表現をもつて書きあらわし、一読理解できるような内容のものとして、広く工業関係者を中心とした一般読者が興味をもつて読めるようにするという事は、言葉にいゝ文字に書くことはできても、実行ははなはだむづかしい。ましてそれが研究発表として、専門家の批判を受ける対象にもなるようにしようということは、相容れない条件を充そうとするものであるとの意見もある。これまで平易な表現で一般読者が興味をもつて読み、理解できるようにするというところに重点を置き、かつ月刊の市販雑誌としたことから来る制約のために、執筆者も生産技術研究所の関係者という範囲から離れることも度々あつた。研究所の事業から全然離れた企画であるなら問題は別であるが、多少ともつながりを持つものである以上この点をもつとよく検討すべき問題である。

約1年前から、研究所内にこの問題を含め、研究成果の発表を如何にして行うべきかということを検討する小委員会を設けて、十分な時間をかけて審議した。その結果専門家の批判を受けるための発表、いわゆる研究発表と、専門外の人々に新しい研究の概要を紹介してその利用の機縁を作ろうというための発表、これを研究紹介と呼ぶことにすれば、この両者を兼ねることは、この研究所のように、できるだけ現場における技術的問題の解決に直接貢献することを目標にしているところでも、おそらくできない相談であろうという結論に達した。

そこで純粋の研究発表は、生産技術研究所報告又はそれぞれの専門の学会誌によることにして、この生産研究は、主として研究所の研究成果を専門外の人にも興味を持つて読まれ、理解できるように平易な表現で紹介するための機関誌にするということになつた。また同時に独立採算を目標とする市販雑誌の性格を満足させるように編集することは、困難な仕事であるから本号から純粋な研究所の機関誌とした。しかし希望者は実費程度の価で自由に求め得るようにし、編集委員はこのような読者が一人でも多くなるように、興味と実益とを兼ね備えたよい研究紹介誌とするため、従来にも増した努力をすることにしてゐる。

このような研究紹介誌を大学の研究所が自ら刊行するという事は、どういう意義があるかという点についても、前記の小委員会はかなり時間を使つて検討した。そして生産技術研究所のように、大学と産業界とを直結し、基礎研究の成果をできるだけ早く実用化することを使命としているところでは、これは非常に重要な意義を持つものであるという結論を得た。しかし大事なことではあるが、本当に効果を挙げるのは容易であるまいという懸念は否定できない。従つて、編集委員ばかりでなく、研究所の全員が非常な努力をすることなく、安易な行き方をしたならば、調子の低い研究発表誌となり、学会誌等で問題にされないような報告だけが載るということにならないとはいへない。そこで、万一そんな結果になつたときは、即刻やめてしまうまでだと私は考えている。

生産研究の新発足に当つて、前記の小委員会の委員諸君、編集委員諸君の労に対して謝意を表すると共に、経済的に負担であつたにもかかわらず3年余の間発行を続け、かつ今回は登録された「生産研究」の誌名をも快く譲つて下さつた誠文堂新光社の好意に深く感謝する次第である。(1952.11.18)